



新古今和歌集初抄



伊地知文庫
文庫20
321
3



文庫20
321
3



一
戀
一
題
七

伊地知氏書冊

一
七



Handwritten text in cursive Japanese style, including a large circled character at the top left and a large character '下' in the middle.

手のひらき... 忠義公

さう思ひながら... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

藤原 惟成

風吹... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

あつた... 忠義公

古 古今の序に...
また...
...

人...
...

人...
...

白...
...

...

題 不云

題 不云

真...
...

...

そこのとけう... 神そのとけうと

正月雨あつてのあつたのあつたの

春風の吹くはつたのあつたのあつたの

水たふす

水たふす... 水たふす... 水たふす...

片思

片思の... 片思の... 片思の...

海

海... 海... 海... 海...

雪の上

雪の上... 雪の上... 雪の上...

秋の枝

秋の枝... 秋の枝... 秋の枝...

にふりかひたりておのれをいふはなほ
こゝろにたゞしき心持なりけるは
いふにふりかひたりておのれをいふはなほ

家より命一付けりて之を以て接改太政大臣

宮内卿の御名をいふは

宮内卿の御名をいふは

吉とあはれし

吉とあはれし
吉とあはれし
吉とあはれし
吉とあはれし

水無流をいふは

大上天皇

思ひつゝの年の御名をいふは

百首の中一冊をいふは

あのみ

あのみ

百首の中一冊をいふは

あのみ

くらのまをかの... 三條院女蔵人近

ゆまよと神うぬ... 神うぬ

み月... 前納言ら任

時鳥... 馬内侍

み月... 馬内侍

多半... 馬内侍

郭公... 馬内侍

や... 馬内侍

時鳥... 馬内侍

らの... 馬内侍

み... 馬内侍

み... 馬内侍

志の事あましうんはらうは後徳大寺大后
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

のちも田んぼをすそのもえうは城の井もたき
のちも田んぼをすそのもえうは城の井もたき

志の事あましうんはらうは後徳大寺大后
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

人よあまの心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

物思ふとてあまの心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

人よあまの心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

和弁 西の心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

志の事あましうんはらうは後徳大寺大后
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

のちも田んぼをすそのもえうは城の井もたき
のちも田んぼをすそのもえうは城の井もたき

志の事あましうんはらうは後徳大寺大后
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

人よあまの心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

物思ふとてあまの心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

人よあまの心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

和弁 西の心をいふればはのちあらう川は
かゝる思ふ心をいふればはのちあらう川は

千五百箇年合々 攝政左政大臣
なげりい今これに爲るべきに御本柄を

及川平公の御事も
百箇箇年合々 攝政左政大臣
御事 御事 御事 御事 御事 御事
御事 御事 御事 御事 御事 御事
御事 御事 御事 御事 御事 御事

あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ

あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ

紅の衣のいろなりや
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ

百箇箇年中に
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ

あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ
あそふあそふ なるひのひのひ

みよきまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは
治すはまゝに人々を治むるは

後述はたまたま

千五百番

大彼言

夏の月

たのめ

忠のあ

神のま

神

たのめらる可き入るふしへのすれりり結りん

語 人つてありむくおれり其の心もさかち白のめ

語 接はる大政大臣を遊百首今令中書省郎男

語 海ゆる近江の語 志はひあつたつた

語 乙の福の燈も照るまのつらふもつらふ

語 名を悪くしつらふつらふのつらふ

語 吉中ふのふ田のふつらふつらふ

逢るはのふつらふつらふつらふ

百首新の中よ恋の心を 惟明親王

逢るはのふつらふつらふつらふ

語 左清門共通具

わら恋を深くおれりつらふつらふ

語 ありぬまてしつらふつらふつらふ

水子と影恋すお首あ合ふま恋の心を

語 七

鳳のうすめの日をよむかきけのまもむるの神の涙
あはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
神のあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
うのけのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
なぬわのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
冬冬冬

定家朝臣

床の霜柱のゆきかきけのまもむるの神の涙
あはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
神のあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
うのけのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
なぬわのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
冬冬冬

いひのこ
あはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
神のあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
うのけのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
なぬわのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
冬冬冬

後集秀社

神のあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
あはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
神のあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
うのけのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
なぬわのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
冬冬冬

夏
あはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
神のあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
うのけのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
なぬわのあはれとろのまをよむかきけのまもむるの神の涙
冬冬冬

家百の命は新選組の志士

橋政大政大旨

古物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

年

入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

かし田ひのむをよめる

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

物あり入所のありの汁なるをわらわす

何 心を憂へりしに
八條院言ふ念

しはも華人の心なるに
心持はるるに

西行法師
あはれなるに

何 心を憂へりしに
心持はるるに

母 心を憂へりしに
心持はるるに

母 心を憂へりしに
心持はるるに

中 心を憂へりしに
心持はるるに

後 心を憂へりしに
心持はるるに

同 心を憂へりしに
心持はるるに

忘 心を憂へりしに
心持はるるに

母 心を憂へりしに
心持はるるに

厚徳

母 心を憂へりしに
心持はるるに

母 心を憂へりしに
心持はるるに

梅... 三修院世居人近
あはれ... 三修院世居人近
あはれ... 三修院世居人近

三修院世居人近

あはれ... 三修院世居人近
あはれ... 三修院世居人近
あはれ... 三修院世居人近

わが世に人か... 高倉院 馬...

つら... 高倉院 馬...

け... 高倉院 馬...

あ... 高倉院 馬...

初會 戀れ 心を 信成 新...

昔の... 結ひ...

古... 結ひ... 高倉院...

わが... 高倉院...

わが... 高倉院...

頌をよむ

山寺のあり

明二年二月の浦にありて其神のまはりにて草花の諸人
の集りて白のすしをたててあそびたりと神のまはりに
人のまはりにてあそびたりと神のまはりに

仔細

あるものありぬおまの照ぬるのまはりにてあそびたりと神のまはりに
九月十日あまたりとおあせりてわが式にうらむを
ある世に結りてあそびたりと神のまはりに

大宰府 敦道親王

枯のよれを照らす金すしをあそびたりと神のまはりに

是をよむ

道信朝臣

白のよれを照らす金すしをあそびたりと神のまはりに
あるものありぬおまの照ぬるのまはりに

延喜抄

このよれを照らす金すしをあそびたりと神のまはりに
あるものありぬおまの照ぬるのまはりに

古く

更在源周子 唱

朝局北窓 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

題 古く 圓融院御歌

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

備徳

朝局北窓 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

朝局北窓 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

朝局北窓 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

大綱言法

朝局北窓 清くもあはれし 清くもあはれし 清くもあはれし

三十一

こゝろのしづかきこゝろのしづかきこゝろのしづかき
女のまじりたてふまじりたてふまじりたてふ
むかしこゝろのしづかきこゝろのしづかき

清くあつたてふあつたてふあつたてふ

三條園自世布入日廿あつたてふ
むかしこゝろのしづかき

新朗あつたてふあつたてふあつたてふ
あつたてふあつたてふあつたてふ
あつたてふあつたてふあつたてふ
あつたてふあつたてふあつたてふ

藤原道経

別記 藤原道経

庭のあつたてふあつたてふあつたてふ

古 くれけくくれけくくれけく
あつたてふあつたてふあつたてふ
あつたてふあつたてふあつたてふ

中侍伝

侍のあつたてふあつたてふあつたてふ

古 くれけくくれけくくれけく
あつたてふあつたてふあつたてふ
あつたてふあつたてふあつたてふ
あつたてふあつたてふあつたてふ

別れは身をたれしは海にまはるやせむまはる
 別れは身をたれしは海にまはるやせむまはる
 別れは身をたれしは海にまはるやせむまはる
 別れは身をたれしは海にまはるやせむまはる
 別れは身をたれしは海にまはるやせむまはる

あひ度あひうきぬよ 海と是別

吾の深き水の底のまはる水もえまはるまはる
 吾の深き水の底のまはる水もえまはるまはる
 吾の深き水の底のまはる水もえまはるまはる
 吾の深き水の底のまはる水もえまはるまはる
 吾の深き水の底のまはる水もえまはるまはる

あはれは師女

○せのまをれはまをるは風のまはるまはるまはる
 せのまをれはまをるは風のまはるまはるまはる
 せのまをれはまをるは風のまはるまはるまはる
 せのまをれはまをるは風のまはるまはるまはる
 せのまをれはまをるは風のまはるまはるまはる

中綱言家持
 中綱言家持
 中綱言家持
 中綱言家持
 中綱言家持

是東の山のまはるまはるまはるまはる
 是東の山のまはるまはるまはるまはる
 是東の山のまはるまはるまはるまはる
 是東の山のまはるまはるまはるまはる
 是東の山のまはるまはるまはるまはる

東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ

東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ
 東海はかきあやうはれあつはれあつはれあつ

わづらひのうらりてこころをかりこころありあつあつとせむさきうらと
わづらひのうらりてこころをかりこころありあつあつとせむさきうらと
あつあつとせむさきうらとわづらひのうらりてこころをかりこころありあつあつとせむさきうらと

かこゆのひの心を 入道前冥自志改大臣

我ううしんを思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

今又せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

古 思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

た〜のめ〜人〜のゆを ちちち伯長 意圖

古 思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

傍 たるはもの〜申て存存す
無人〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ
たるはもの〜申て存存す

女を〜申て存存す

〜申て存存す

〇 つ〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

つ〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

つ〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

つ〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

つ〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

つ〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

つ〜の思ふ人せむさきたるひの思ふ人せむさき今せむさきの思ひ合ふ

あはれ... 神... 人... 田... 清... 神...

い... 人... 田... 清... 神...

か... 神... 人... 田... 清... 神...

よ... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

有糸... 母

た... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

戀... 田

中... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

君... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

あ... 神... 人... 田... 清... 神...

上の方のわが身の上よりとて死ぬるべきやとて思ふに
出でし方の人ありては死ぬるに似たりとて思ふに
うらやまの心は侍て文よきまゝにこそしとてあり

ふれはははのうらやまに平 偏つれ 謙徳公

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

昨日のまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては
あまのまはらに幸ひありては

今いひて書物にやまはらふるものありき
 源 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに

源 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに

源 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに

源 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに
 女侍のちゆは侍のしるはに

いほ... 甲 勢 敦慶親五女 母伊勢

更級の止より外より月も... 法行

天... 押... 月... 人...

の... 日... 月... 人...

入... 月... 日... 人...

西... 人...

作... 月... 日...

題... 藤... 聖... 衛... 中...

今... 月... 日... 人...

面... 月... 日... 人... 肥... 後...

く... 月... 日... 人... 後...

右... 月... 日... 人... 田... 中... 五十二

後門よりひびきしるる感得をいふまじく昔言
ちのちありて 増 月を引くはちのちありて
いふは山にけりいふは山にけりいふは山にけり
いふは山にけりいふは山にけりいふは山にけり
いふは山にけりいふは山にけりいふは山にけり
いふは山にけりいふは山にけりいふは山にけり

月のち いふは山にけりいふは山にけりいふは山にけり
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて

くはしちを引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて

物思ひたるはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて

くはしちを引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて

本意の月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて

百首新中 太上天皇

くはしちを引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて

あまの昔事 合 攝政 古 政 大臣

めくはしちを引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて
月を引くはちのちありて 増 月を引くはちのちありて

永原

古川... 神... 月... 左衛門... 菅通玄

歳め

今

今... 月... 菅通玄... 左衛門... 菅通玄

題

拾改古の文

男のこゝろを月夜に思ふ

古 月の光は 人の心 照らす 月の光は 人の心 照らす

わがこころを月夜の光に照らす

松の風を思ふ 松の風を思ふ 松の風を思ふ 松の風を思ふ

古の人のこころを月夜の光に照らす

友京秀徳

八月十日おれがこころを月夜の光に照らす

わがこころを月夜の光に照らす

わがこころを月夜の光に照らす 拾改古の文

風市... 千の百番... 刑部... 西行... 法師

百首... 千の百番... 刑部... 西行... 法師

千の百番... 刑部... 西行... 法師

千の百番... 刑部... 西行... 法師

千の百番... 刑部... 西行... 法師

千の百番... 刑部... 西行... 法師

千の百番... 刑部... 西行... 法師

千の百番... 刑部... 西行... 法師

今よりおのれは... 建仁元年...

建仁元年... 土御門...

おのれは... 格中...

吉... あり...

あ... 格中... あり...

建仁元年

情... あり... あり...

五九

志ののちをいふはあつた

宜村門後丹後

古 志 志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

志ののちをいふはあつた

けりて今をわするもくをまじはれ物うとれる信て形

くちりていふ屋とくしうまうり
せしきりてくちりてうりうのまじはれ物うのる信て
ちの今をわするもくをまじはれ物うのる信て
題 ちくま

今くわの外のたてぬきちくまうりうの信の上風

古 ちくまのたてぬきちくまうりうの信の上風
すりていふ屋とくしうまうり
けりて今をわするもくをまじはれ物うのる信て
ちの今をわするもくをまじはれ物うのる信て
題 ちくま

らもまきく物もや人の思はれいぬるをわのねりてわのねりて

白のいぬるもあつむいぬるもあつむ

古 ちくまのたてぬきちくまうりうの信の上風
すりていふ屋とくしうまうり
けりて今をわするもくをまじはれ物うのる信て
ちの今をわするもくをまじはれ物うのる信て
題 ちくま

星のあつむいぬるもあつむいぬるもあつむ

古 ちくまのたてぬきちくまうりうの信の上風
すりていふ屋とくしうまうり
けりて今をわするもくをまじはれ物うのる信て
ちの今をわするもくをまじはれ物うのる信て
題 ちくま

人を先の人とすむれん人なりしに
ありて人なりしにありて人なりしに
人の心ありしにありて人の心ありしに
人の心ありしにありて人の心ありしに

友系惟成ははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに

花山院

あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに
あつてははるる人なりしに

あつてははるる人なりしに

あまの海よりかきつりてのたまはるる神のたまはるる
 神のたまはるる神のたまはるる神のたまはるる
 のたまはるる神のたまはるる神のたまはるる

○物

あまの海よりかきつりてのたまはるる神のたまはるる
 神のたまはるる神のたまはるる神のたまはるる
 のたまはるる神のたまはるる神のたまはるる

○浦

あまの海よりかきつりてのたまはるる神のたまはるる
 神のたまはるる神のたまはるる神のたまはるる
 のたまはるる神のたまはるる神のたまはるる

まろしん田おの霧の霧しうけはあうらうも

う紀まう人をかえはらがりけつてあうらうも

うあそいあいののいとしいあいらのあいらもあ

いあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

今とていしんの人をかえはあいらのうあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

あいらあいらあいらあいらあいらあいらあいらあいら

月をこころにうつりては 福をのこすなり
ちり川をこころにうつりては 古風をのこすなり
恨つぬるおの神のうらみのこころの 法系深きなり

中細言家持よつらりる 山口女五

芦(り)うらうらうのこころの 田んぼのうらうのこころの

塔(た)のまのまのこころの 田んぼのうらうのこころの

題(だい) 三(さん)つらりる 青深(あおふか)き

うらうらうのこころの 田んぼのうらうのこころの

おののこころの 田んぼのうらうのこころの

春(はる)のよのよのこころの 田んぼのうらうのこころの

おののこころの 田んぼのうらうのこころの

おののこころの 田んぼのうらうのこころの

おののこころの 田んぼのうらうのこころの

春のよ女のいひまはつりて新まつり
かきつりてあはれはるるまのよに 結實のむす

源 あはれはるるまのよに
いひまはつりて新まつり
結實のむす
結實のむす

源 方もたのむすはるるまのよに
結實のむす

百首 芥川 あはれはるるまのよに
結實のむす

源 あはれはるるまのよに
いひまはつりて新まつり
結實のむす
結實のむす

其後

源 方もたのむすはるるまのよに
結實のむす

千五百首 芥川 あはれはるるまのよに
結實のむす

源 あはれはるるまのよに
いひまはつりて新まつり
結實のむす

源 方もたのむすはるるまのよに
結實のむす

源 あはれはるるまのよに
いひまはつりて新まつり
結實のむす

口付のくろく

馬肉付

片々（？） 此のくろくは...

此のくろくは... 馬肉付... 此のくろくは...

君

此のくろくは...

此のくろくは... 馬肉付... 此のくろくは...

年比... 此のくろくは...

此のくろくは... 馬肉付... 此のくろくは...

此のくろくは... 馬肉付... 此のくろくは...

前中細言教書母

おのひかりの公もつらよと白雲の 之部は致平親王

出立方致平をせむるは

伊予井より志止る鳥のたをて 躬恒

伊予井より志止る鳥のたをて 躬恒

伊予井より志止る鳥のたをて 躬恒

伊予井より志止る鳥のたをて 躬恒

伊予井より志止る鳥のたをて 躬恒

伊予井より志止る鳥のたをて 躬恒

伊予井より志止る鳥のたをて 躬恒

天曆御年

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

春のひておまそとち田のんりりあ

いぬのささるの神人の衣のり影のうらりり時を具え
けしてささるの神人の衣のり影のうらりり時を具え
うらりり影のうらりり時を具え
うらりり影のうらりり時を具え
うらりり影のうらりり時を具え

歌 不 成

女 弟 弟 元 吉

何ぞの恋を思ふ程くしてあふにあらはる浅うらりり

何ぞの恋を思ふ程くしてあふにあらはる浅うらりり

何ぞの恋を思ふ程くしてあふにあらはる浅うらりり

何ぞの恋を思ふ程くしてあふにあらはる浅うらりり

水の上 舟 舟

水の上 舟 舟

水の上 舟 舟

水の上 舟 舟

謙 徳 二

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの

たうもさのつねぬ影のあふささるの



